

続・戦国時代禁裏女房の基礎的研究

―下級女房たちを中心に―

松 蘭 齊

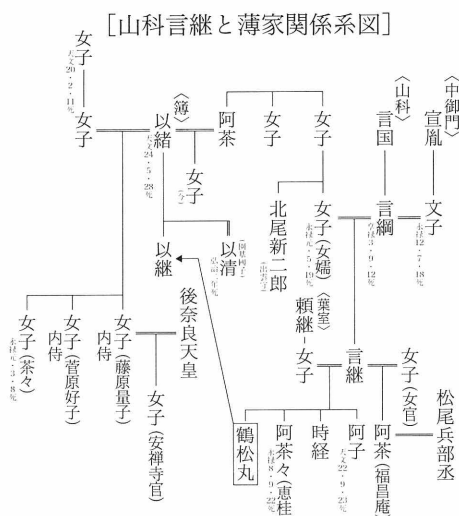
はじめに

前稿^①において、後土御門天皇から後奈良天皇にかけての禁裏の女房の上層部について、その補任状況や出自などを復元したが、ここでは彼女らの下で働いていた女性たちについて考察を進めたい。

「局」という居住空間であり応接を含む執務室をもつ上層の女房たちに対して、女房という、本来部屋の意味を持つ表現を使つてよいかには若干問題があり、一方、有職故実的な表現として「女官」(この場合、ようかんと読むらしい)という用語もあるが、こちらも「女官」という語自体に宮廷で働く女性全体を指す場合もあり、またここで対象とする長橋局の官女たちまでそれに含めるには問題が残ることもあり、ここではひとまず女房という言葉を用いていくことにする。

朝廷の下級の女房・女官についての先行研究は多くはない。概説的な研究で触れられることは多いが、中世前期について、中原俊章氏による「中世の女官」^③が、中世後期については、前稿でも紹介した奥野高広氏の研究^④、近年では清水克行氏の研究^⑤くらいであろう。女性史的な視点から、京内外で働く庶民の女性たちへの関心は強く研究も多く蓄積されているが、禁裏の下級女房たちについてのまとまった研究は管見に入っていない。

研究が少ないことの原因が史料の稀少さにあることは言うまでもない。基本的な史料となるべき、平安時代中期以来の天皇・貴族の日記においても、上層女房については結構記事の中に登場するが、彼女たちについては、采女や女孺などの職名で言及されることはあっても、その個人的な名が記されることはほとんどなく、大嘗会などの天皇の代替わりや女叙位などの諸儀式の記事などで、間歌的



にその名をまとまって知ることができる場合か、何かの事件に巻き込まれて登場する場合しか知られない。職名や大体の人数については把握できるが、その出自などについての情報が乏しく、『尊卑分脈』などの系図類でも補うことは難しいのが現状である。また、断片的に現れる彼女たちの名前が、実際似たような名前が多いのだが、たとえ別の史料で同じ名前であっても同一人物かを確認することはなかなか難しい。ただでさえ少ない史料をつなぎ合わせて実証することがなかなか難しいのである。

中世前期については、以上のような理由でその考察には困難を極めるが、後期になると、公家などの日記に関しては異なった状況が

生まれてくるようである。この点は別に触れたことがあるが、朝廷・公家の政治的・経済的な地位の低下は、彼らの価値観に変化を与え、彼らが「家」の日記として記し続けるその

記事の内容にも変化を生じさせていった。それは、単に地位の低下により彼らの視点も下がり、中世前期以前に比べより距離が近くなった下層の人々のことも記すようになったということにとどまらず、日記の記載対象が、彼らの家職を継承する男子や有力寺院に僧として送り込んだ子弟ばかりでなく、妻や娘たち、それに「家」の下部で働く侍や女房、下男・下女までも広がっていることが背景となっている。

別稿で述べたように、中世後期の「家」では、その「家」の女性たち、妻や他家に嫁いだ娘や尼となった娘たち、そしてそこに仕える様々な女房たちが支える部分が前代と比べ相対的に増大していることは否めないであろう。男性の当主たちも彼女らを把握しなければ、「家」の管理は不可能なのである。

女房や下級の奉公者たちについては、たぶん、中世前期ではその管理は家司などのレベルで行っており、主人たちの日記の記載対象ではなかったと考えられるが、「家」の規模が縮小したためか、その質が変化したのか、彼らも記載対象に入ってくるようになる。

それでも彼らの日記を書く意識は前代からのそれを受け継いでおり、また公家もその身分により一律にその視点が下がっているわけではない。現存する九条家などの摂関家や三条西実隆などの大臣クラスの日記は前代からの意識を受け継いでいる側面が多いと思わ

れ、家族の女性についての記事は多いが、下層の人々への言及は乏しい。女房についても、禁裏やそれぞれの「家」に仕える上層の女房が中心であり、以下の公家の日記でも状況はそれほど変わらない。

しかし、その中で例外的に禁裏の下級の女房についての記事が豊富な日記がある。それは山科言継（一五〇七～七九）の日記『言継卿記』である。室町期の『教言卿記』以来残されている山科家の日記の一つであり、大永七（一五二七）年から天正四（一五七六）年にかけて五〇年にわたる自筆原本が残されている。そのため、大永六年践祚し弘治三（一五五七）年に崩御した後奈良天皇の時代から次の正親町天皇の初めの頃にかけての下級女房の状況を知ることができる。

山科家は、善勝寺流藤原氏の一流であり、大体中納言を極官とする中級の公家の「家」であった。言継の祖父定国の時、嫡子の定言が盗賊に殺害されるという悲劇に見舞われ、その跡を継いだのが定言の弟言綱であった。言綱は正妻として中御門宣胤の息女を迎えたが、彼女との間に男子が得られなかったらしく、結果、「女孀」との間に生まれた言継を嫡子として「家」を継承させることになったらしい。¹⁴ この「女孀」であった女性が母であったことが、言継の日記に下級の女房たちの動静を「例外的」に豊富に記すことになった一因と考えられる。

また、当時、禁裏の酒・食事などを賄うセクションである台所で働く「末」とよばれる女性たちの一人に、後述する阿茶という女性がいた。彼女は「臺所阿茶〔薄室也、予外祖母之妹也〕」と見えるように、言継の外祖母の妹であることがわかるから（前ページの系図参照）、女孀であった言継の実母（呼称は不明）以外に、言継の周囲には禁裏の下級女房たちが縁者と働いており、彼女らの職場の同僚たちも当然、言継のことを幼い時から見知っていたのではないだろうか。当時、堂上公家と下級の女房との間に生まれた子弟は少なかつたと思われるが、「家」の跡継ぎになれるのは限られていたであろうし、成長して堂上公家として出仕しても、副業の町医者としての活動から京都内外の町の人々との交際は頻繁で、母の同僚たちも当然その中に含まれていた。例えば、言継の外祖母ではないようであるが、阿茶の姉にあたるという八四歳の老女が風邪を引いたため往診を頼まれ、言継は脈を診て薬を処方しているが、彼女たちにとって自分たちの同僚が生んだ子が堂上の一員として活躍する誇らしさとともに、頼りになるホームドクター的な存在として二重の意味で親しい存在であったことが推測されよう。そのような関係を生涯続けていったのは、彼の性格からなのか、当時の公家たちが置かれた状況がそうさせたのかは難しいが、彼の日記に下級女房たちが数多く現れるのは、このような事情を想定しておかなければ

ばならないようである。

もう少し時代が下った一七世紀前半、山科家より少し格下の堂上公家である西洞院時慶という人物も日記を残しており(『時慶記』)、彼の日記にも妻や娘以外の縁者や下働きの女性たちが大勢登場する。後述するように彼の娘の一人は内侍として出仕し、その関係の記事が豊富に記されているが、言継の日記のように禁裏の下級女房のことは記されていない。これは彼の交際圏の問題であるようで、言継の子の言経の日記にも父親のそれ程、下級女房の記事は記されていないので、やはり言継自身の事情によるとみるべきであろう。

第一章 局の官女たち

表1は、後奈良天皇期に現れる禁裏の下級女房を整理したものであるが、一応、A上級女房に仕える者(官女と表現される)、B内侍所に仕える采女・刀自・女孺、C台所に仕える末・非司とよばれる者に区分して例示した。また仮名で表記したり漢字で当てたり表記がさまざまであるのでそれらを女房名の後に示し、次に日記の記事から知られる出自や配偶・養子関係などを記した。●はその年中に日記に見える場合、×は見えない場合、▲はその年に亡くなったことがわかる場合である。

すでに奥野氏によって指摘されているように、『言継卿記』に見

える次のような記事は、各セクションの員数を示しているようである。

①「禁裏末之物五人、女孺・内侍所衆兩人、長橋官女三人に、不思議之南良油煙一丁つ、遣候了、ひ司息女にも遣候了」(天文一一・一・四)

②「当番之間九過時分参内、大所へ樽一遣了、七過時分退出了、末衆五人・同非司、内侍所(五位、アカ)、女孺、長橋之女房衆三人、以上十二人に薰物一貝宛遣之」(天文二五・一・七)

③「内侍所へ参詣、御最花十疋(先折紙遣之)、さいに華撥圓(一貝)、五ゐに保童圓(二百粒)、あこ・女孺等に華撥圓一貝宛遣之、次臺所へ罷向、末衆五人に華撥圓一貝宛遣之、非司兩人に保童圓(二百粒宛)遣之」(天文二一・一・一一)

史料①③から、末が五人、長橋の官女が三人、非司が二人という人数が知られるが、表1で示される各年次におけるそれぞれのメンバー数とほぼ一致していることが知られる。これに内侍所(采女・刀自)のメンバー四人というのものが加えることが可能であろう。

各上級女房の局に仕える女性たち、いわゆる官女については、当該期では長橋局(長階、勾当内侍)以外はあまり確認できない。長橋局は、禁裏女房としての陪膳などの職務以外に、内裏での行事や職務も公家たちにここから伝達されることが多いし、その出欠やさ

表1 後奈良天皇期下級女房一覧

				大永6	大永7	享禄1	享禄2	享禄3	享禄4	天文1	天文2	天文3	天文4	天文5	天文6	天文7	天文8	天文9	天文10	天文11	天文12	天文13	天文14	天文15	天文16	天文17	天文18	天文19	天文20	天文21	天文22	天文23	弘治1	弘治2	弘治3		
A 女 房 官 女	女房名	出自・配偶他	所属																																		
	阿茶々		新大典侍	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	●	×	×	×		
	あや		播磨	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
	五々	治部大蔵丞妻	伊予	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	●	×	×	×	×	×	×	×		
	阿茶々		伊予	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	●	●	×	×	×		
	さい		伊予	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	●	●	●	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
	五位		長橋	?	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
	右京大夫		長橋	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	×	×	×	
	鶴		長橋	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	●	●	×	×	×	
	あや々（彌々）		長橋	?	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	×	×	×	×	
	茶々々（地）		長橋	×	×	×	●	●	●	●	×	×	×	×	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	●	×	×	×	
	あか々		長橋	×	×	×	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
	あ五々		長橋	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	●	●	●	●	×	×	×	×	
	いちや		新内侍	?	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
	あか々		新内侍	×	×	×	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
	阿五々		新内侍	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	●	×	×	×	×	×	×	×	×	
B 内 侍 所	阿五（子）		采女	?	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	×	
	さい	五辻養女		×	×	×	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	×	
	五い（位）		刀自	?	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	×	
	あか			?	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	×	×	×	×	×	×	×		
	かか女			×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	●	×	×		
	あゝ子		女孺	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
	?	清水寺目代〔圓陽院宗澄〕女	女孺	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	?	?	▲	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
C 台 所	?	同上	女孺	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	×	×	×
	?	鞍馬寺真勝坊	女孺	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	△	×	
	あか々		末	?	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	×	×	×
	むめ（梅）		末	?	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	?	?	△	×	
	たと		末	?	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	×	×	×	
	か々	広橋国光妾	末	×	×	×	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	×	
	阿茶	薄以緒妻	末	×	×	×	×	×	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	おと		末	×	×	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
	とも		末	×	×	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
	ひさ		末	×	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
	ひつ		非司?	×	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
	かさ		非司?	×	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
	?		非司	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	▲	×	×	×	×	×	×		
	徳女		非司	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	●	●	●	●	●	●	×	×	×	×	
	け々	高橋某妻	非司	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	●	●	●	●	●	●	●	×	×	×	

*△はその時点で辞めている者、▲は、その年に死去していることを示す。

さまざまな報告・陳情などもここが窓口となっており、その職務の重要性また多忙さから言っても、禁裏女房の中では、もっとも多くのスタッフを抱えていることは容易に想定される。公家・官人たちがこの局の官女たちと接する機会も多かったものと思われ、逆に『言繼卿記』においても長橋以外の女房の官女がほとんど現れないのは、いないのではなく言繼が接する機会が少ないためとも考えられよう。まずは、この長橋局の官女から述べていこう。

(1) 小督（長橋局の官女）

三条西実隆の日記『実隆公記』には、上級貴族であるためか、このクラスの女性名はほとんど記されないが、唯一例外がこの小督という名の長橋の官女である。

現存の『実隆公記』が残り始める文明六（一四七四）年の正月二日条に「及^レ晩長橋小督来」と見え、以後その来宅だけが時折記されるが、同九年にこの女性が突然亡くなることで彼女がどのような女性であったかが知られるのである。

④ a 「抑翌朝聞^レ之〔子下刻、十日事也〕、長橋局官女小督逝去〔生年四十二才〕云々、旧冬十二月十三日喪^レ母在^レ里、去六日誕生女子〔彼子則死、難産無^レ比類^者也〕、源垂相密通云々、彼女房自^三予三歳歟四歳歟之時、候^三亡父後称名院亭、予六歳之秋比、依^三亡母入魂^三参^三長橋局〔于^レ時右衛門内侍〕、自

爾以来已十八年也、勾当内侍周章異^レ于^レ他者乎、予又平日交遊之好甚深、当□□嗟之思難^レ忍而已、有為世界可^レ厭可^レ悲々々」（『実隆公記』文明九・一・一九）

b 「今日提婆品一品書卒都婆面、是則為^三小督〔法名珪蓮、道号玉峯〕追善也、多年官女之好、近来交友之睦、誠以難忘者也、仍抽^三寸丹之志^三而已」（同前文明九・一・二八）

この時、実隆は二三歳で、亡くなった小督は四二歳（史料④a）というから二〇歳近くも年上の女性である。実隆は、人の死について、例えば平安期の公卿の日記に見える薨伝のような記事を記すことはほとんどないので、④bのように個人的に追善を行なった上、彼女の法名と道号まで日記に書き記して悲しんでいるのはかなり珍しく、よほど彼にとつて大事な女性であったことが感じられ興味深い。ところで、史料④aに見えるように、彼女は、源垂相（庭田雅行、権大納言で当時四四歳）と密通し懐妊、正月六日に女子を出産、しかし「無^レ比類」き難産の結果、母子ともに亡くなってしまったのだが、続けて彼女の来歴を記している。小督は実隆が三歳か四歳の頃に実隆の父公保（後称名院）に仕えるようになった三条西家の女房であり、やがて実隆六歳、つまり長祿四（一四六〇）年に母の幹旋で長橋局に官女として仕えるようになったという。この年の正月

二八日に公保が六三歳で薨じているので、三条西家に仕える女房たちにも人員整理が行われたのであろう。

家の後家が女房たちの再就職を援助している点も面白いが、長橘局の官女となって以来一八年にわたって勤めており、それは彼女の死によって「勾当内侍周章異^レ于^レ他者乎」と記すように女房としても大変有能であったためによるものであろう。

禁裏女房たちにとって、有能な局の官女を探すのはなかなか大変であったようである。表1において、A女房官女の項にみえる下級女房たちが、B内侍所やC台所の者たちと異なり、長期にわたって確認されるものが少ないのは、なかなか安定的にスタッフを維持できなかったことを反映しているのであろう。

このような官女は、女房本人が探してくる場合もあったであろうが、女房がまだ若かったり経験不足な場合、その後見役の女房やその実家で探して採用したようである。

表2は、慶長五(一六〇〇)年八月に十歳の娘を内侍として出仕させた西洞院時慶が、出仕時に採用した「鍋」という名の官女の関係記事を編年順に並べたものである。

彼の日記に「新典侍ノ局就^ニ親類^一、局^ニ御預也^⑧」とあるように、親類であった新典侍の局に預けられる形で出仕が始まったが、内侍の身边で雑用をこなしたり、実家との連絡係として官女は、特に幼

表2 『時慶記』に見える新内侍(平内侍)の官女鍋

	年・月・日	記 事	備 考
1	慶長5・9・3	新内侍へ官女鍋ヲ初而遣候	官女として雇用
2	慶長5・11・18	新内侍ノ鍋ニ二十疋スソ引ニ遣候	「スソ引」
3	慶長7・5・20	新内侍ノ鍋・与衛門尉カカ・等、内儀ノ供ニ来、食申付候	時慶の室の外出の供
4	慶長7・7・5	右衛門督局へ煩見舞ニ新内侍ノ鍋ヲ被遣候	他の女房への見舞いの使い
5	慶長7・7・23	新内侍ノ官女鍋無奉公儀ニ付而曲事旨申遣候	職務怠慢への叱責
6	慶長8・8・7	新内侍ノ鍋、俄ニ暇乞可出由申候、沙汰限義也	休暇願
7	慶長9・6・6	局ノ鍋来、快気カ	病氣
8	慶長9・8・19	新内侍ヨリ女三宮へ御樽進上、強飯樽桶ニ一・スルメ十連・昆布以上、使鍋ニ曝ニ端被遣候	貴頭への使い、そのご褒美。
9	慶長9・12・28	新内侍へ遣文、鍋無沙汰義ニ為折檻申遣候	職務怠慢への叱責
10	慶長10・6・18	鍋・桐召寄、使ノ口上口屈義申候、改之折檻候	官女としてのしつけ
11	慶長10・8・2	平内侍ノ鍋、女院御所へ参、御頼無沙汰ニ付追籠	職務怠慢への叱責
12	慶長10・8・16	平内侍ノ官女鍋ニ出暇間、算用義ニ長左衛門尉ヲ宿へ遣メ申付候	解任

い女房の場合、必要不可欠であったと考えられる。この「鍋」の場合、表2の9・10・11から知られるように四年目くらいから問題が目立つようになり、結局五年目で辞めさせられてしまった。

表2の10に見えるように「桐」という女性が採用されたようであるが、ほとんど活動は確認されず、慶長九年にも「辰」という官女が採用され、「局ノ置目事^⑩」つまり局の規則のようなものを申し聞かせているが、彼女もその後の活動がつかめない。他に「田舎^⑪」、「亀^⑫」などが内侍の官女

として見えているが、ほとんど短期間しか活動がうかがえない。現在全一〇巻中第四卷（慶長一四年）まで刊行されている『時慶記』の範囲であるが、最初に採用された「鍋」が結局一番長く続いた官女であつたようである。

時慶の場合、娘の一人「糸」も後陽成天皇の女御近衛前子（前久息女）に女房として仕えていたが、その局には「竹」という官女が雇われていた。この「竹」は自分の娘も「糸」の局で働かせており、さらに「糸ノ官女茶々来、竹力取次、小女ノ年ヲ切テ奉公ノ事書物ノ案ヲ認遣候」とあるように、「取次」つまり官女の斡旋などもやっていたようである。なかなか定着しないこのクラスの女性たちを採用するためには、この手の女性も必要不可欠だったのである。この「竹」は自分の娘「カチ」を走らせ（出奔させ）、そのことで女御の御所から追放させられているのだが、もつと実入りのよい就職先を見つけたためなのかもしれない。

（2）右京大夫（長橋局の官女）

長期にわたって、長橋局の官女として確認されるものとして右京大夫という女房がいる。この右京大夫は、文亀元（一五〇一）年に「右ギヤウ大夫〔長橋御女房也〕」として現れ、慶長一四（一六〇九）年にも「長橋ノ右京大夫」として見えている。一〇〇年以上に亘っているから当然同一人物ではない。史料的には、文亀頃（一五〇五

）（〇四）の者、『言継卿記』に天文一一（一五四二）年から天文二二年にかけて見える者、『時慶記』に慶長七（一六〇二）年から一四年にかけて見える者の少なくとも三人はいたようである。

⑤ 「於勾当内侍有^二一献^一、送^二一樽^一了、佳例也、薰物貝三荷〔勾当局・冬内侍局・幡磨局〕各遣^レ之、女官四人〔右京大夫・茶々子・阿茶々・コチコチ〕以上同遣薰物貝、年々之儀也……」（『元長卿記』永正二・一・一二）

この史料⑤は、記主の甘露寺元長が、勾当内侍の局つまり長橋局で行われる新年会のような宴に招かれ、そこに参会した女房たちに「薰物貝」を贈ったという記事である。ここに見える「女官四人〔右京大夫・茶々子・阿茶々・コチコチ〕」は、参会した内侍たちの官女であると思われるが、右京大夫だけが女房名で他の官女たちと異なっている点に注意すべきであろう。前述の小督も女房名であつたし、『時慶記』に見える新内侍の官女「鍋」はこの記事に見える「茶々子」などの一般的な当時の女性名と同じであつた。それは女房としての格を示しているのであろうし、局における職務にも違いがあつたと考えられる。

この右京大夫が、当該期の上級女房に見えるように、自分の娘（養女も含む）や姪などの縁者に相伝していくような「職」となっていたかどうかは今のところ確認できないが、その可能性が強いように

思われる。

(3) 五々(伊与局の官女)

町医者を副業としている山科言繼は、ある日、治部大蔵丞という武家の男の子の怪我を診察した。

⑥ a 「治部大蔵丞子春鶴あやまち足、仍愛洲葉俄調合遣之」(天文一九・七・二二)

b 「治部大蔵丞男(春鶴、十四歳)一兩日所勞云々、於伊与局脈取之(官女五々子)風痢也、人敗に加肉豆蔻・驚粟、三包遣之、以後祐乘三位葉遣之云々」(同一九・八・一八)

c 「去夜戌下刻治部大蔵丞息春鶴於伊与局遠行云々、其砌被出云々、官女五々子也」(同一九・九・一四)

「春鶴」という名の一四歳の男の子は足を怪我してしまい、言繼はひとまず薬を調合したが(⑥b)、ひと月後、敗血症もしくは破傷風にでも罹ったのだろうか、体調が悪くなり、伊与局のもとで再び言繼は診察し、別な薬を調合したが、手に負えなかったためか専門家に後を任せようである。しかし、「官女五々」の子であるというこの少年は、そのさらにひと月ほど後に亡くなってしまったという(⑥c)。少年は伊与の局のもとで看病されていたようであるので、その母親の五々は伊与の局の官女であろう。奥野高広氏もすでに指摘されているように、正式かどうかは不明であるが、五々は

治部大蔵丞という武士に嫁していたのである。

この治部大蔵丞は『言繼卿記』に散見する武士で、光栄という名の「武家奉行」つまり幕府奉行人であったことが知られ(⑦c)、亡くなった「春鶴」以外に「千鶴」という男の子がいたことがわかる。同じ「鶴」の字なので、やはり「五々」の子かもしれない。

⑦ a 「今日礼者、広橋弁・(武家奉行)松田対馬守・(同子)同孫三郎・(同奉行)飯尾大和守・(同)治部大蔵丞・(藤中内)栗津修理亮・主殿助・同新大夫・(高畠与力)大角民部丞・高屋孫二郎等来云々」(天文一五・一・五、(一)内は傍注、以下同じ)

b 「今日禁裏御楊弓六十一度有之、御矢取加田弥三郎・(奉行治部大蔵子)千鶴也、(竹内殿)幸菊等也」(天文一九・二・一四)

c 「自竹内殿、退出之次必可参之由有之間、直に参之処、御連歌六十句計終了、可合力申之由被仰之間、十二句計申候了、御人数、門跡・永相朝臣・経元・(治部大蔵丞)光栄・(武家奉行)・(松田主計允)光秀・(対馬法橋)清舜」(天文二二・五・二八)

また⑦cからは、竹内門跡(天台門跡の一つ曼殊院)に連歌などに呼ばれて出入りしていたことが知られ、『言繼卿記』の他の記事

からは、永禄年間に尼門跡の一つ岡殿にも出入りしていたことが知られる。⁽²⁹⁾

系譜関係は不明であるが、『言継卿記』にはこの大蔵丞以外の治部氏の者も現れる。公家の中御門家の和歌会や宴席で言継と一緒にするのは、治部又四郎という人物で、中御門宣綱らとともに又四郎の宿所に招かれ、遊女を呼んで遊ぶということもあったし、同じく公家の甘露寺家や広橋家に呼ばれることもあった。また、言継が暦・陰陽道の勘解由小路家の内祭に招かれた際には、吉見下総守・高和泉守・一色式部少輔・大和刑部少輔ら奉公衆のメンバーと共に、治部又四郎と同席した。⁽³⁰⁾

官女五々も、この治部氏のように禁裏・公家とも親しい関係にある上級武家と交際範囲にある女性と考えてよい訳であり、公家の日記などの中では目立たないが、和歌や連歌などを通じて公家文化を共有する身分の出自と考えてよいのではないだろうか。

第二章 内侍所

内侍所のトップである一采女は、次の史料⑧から知られるように、自らも官女を持てる身分であった。

- ⑧ a 「内侍所へ盗人入云々、一采女〔阿子〕官女今晩宿へ行、不審之間尋出召籠也、予五辻へ罷向、兩人彼在所へ罷向、

堅申付了、次兩人内侍所へ罷向、至寅刻種々談合、及曉天「帰宅了」(天文二三・一一・七)

- b 「先内侍所へ罷向、彼官女未_レ及_二白状_一云々、…内侍所女房衆、今夜用心迷惑之由申候間、予臥了」(天文二三・一一・八)
- c 「於_二内侍所_一一盞有_レ之、早旦彼女之宿主、去夜々半計尋出云々、帰宅之後、廳使有_レ之、白状、則小袖〔七〕・帷〔四〕以下、以上廿九種取返持来了、神妙奇特之儀也、各満足、晩頭鼻そくへきの(処)路次にて、知恩寺長老乞請被_レ放云々」(天文二三・一一・九)

内侍所に盗難が起こり、その犯人として「一采女」である「阿子」の官女が容疑者として拘束された。なかなか白状しなかったが、結局、官女の「宿主」が盗品である「小袖〔七〕・帷〔四〕以下、以上廿九種」を発見し、それを突き付けられてついに自白に及んだというものである。特に⑧cは、当時盗みを犯した者が鼻を削がれるという刑に処せられることがわかる著大な記事である。宮中には、それこそ平安時代からしばしば盗人に侵入され被害が尽きないが、内部の者の犯行もしばしばあったようである。例えば、内侍に出仕した西洞院時慶の息女に仕えていた「胡蝶」という「下女」が、長橋の官女の一人「綾屋」(アヤヤ)から盗みを犯したと訴えられ、後見の時慶らがその対応に追われていることがわかる。⁽³¹⁾ 出入りが多

いためか、あまり素行のよくない者も雇われたらしいが、『言継卿記』には、「去夜長橋局下口へ盗人来云々、下女発声、早退散一種も不_レ取_レ之云々、南之辻切_レ之₍₃₆₎」とあるように、防犯に役立っている場合もあることを彼女たちの名譽のために付記しておくが、彼女たちが局に住み込んでいることをうかがわせる記事でもある。

(1) さい (才・祭)

享祿二(一五二八)年から弘治二年まで、ほぼ当該期を通じて見える、内侍所の采女かと考えられる女性である。台所で花見の宴が行われた時、言継を含む堂上の公家衆とともに参加した女房たち「未之衆、あかゝ・かゝ・むめ、内侍所之さい〔五辻女中〕・五位、女儒等也₍₃₆₎」の中に見え、割注に「五辻女中」とあるように、下級公家の五辻家の関係の女性であることが知られる。また、天文二二(一五五三)年九月二日、言継の娘の一人阿子が亡くなるが、花開院で行われた葬礼に見舞に来た人々の中に「内侍所之さい〔五辻養女〕」があり、彼女は五辻家の養女であったことも知られる₍₃₇₎。

五辻家は、宇多源氏の庶流であり、六位の藏人を務めた後、五位に昇叙され、衛府の佐などを歴任する諸大夫の家で、代々持明院統天皇家の上北面に列してきた。室町期の資仲は、やはり宇多源氏綾小路家の支流庭田経有の子を養子としており、その朝仲の姉妹が伏見宮貞成の室となって後花園天皇・伏見宮貞常親王を生んだ南御方

(後の敷政門院)であったから、当時の天皇家や伏見宮家とも近い存在であった。五辻家は、後述する薄家などともに新興の公家層といつてよい家柄であるが、この時期、従三位・非参議に列するようになったのも、譜代の諸大夫や下級官人層の優遇策によるものだけではなかったかもしれない。

この時期の当主は為仲で六位の藏人を務めていたが、二〇代前半の年齢であり、実父は閑院流三条の庶流滋野井季国であったから、この「さい」とともに天文九年に亡くなった諸仲(従三位、元治部卿)の養子としてこの家に入ったと考えられる。「さい」の実家は、永祿七年に「内侍所之さい〔諏方神(主) 右兵衛姉也〕」と見える₍₃₈₎ので、その兄弟が諏訪社の神主を務めていたことは知られ、諏訪社の社家であった可能性が強い。

ところで、この内侍所の「さい」は、正親町天皇の永祿・天正期にも見えており、言継の子言経の日記に見えるあたりまではぎりぎり同一人物と見られなくもないが、『時慶記』に天正一九(一五九二)年より慶長一四(一六〇九)年まで現れる「内侍所才」は、さすがに別人であろう。残念ながら出自や親子関係などを示す史料は管見に入らないが、前述の長橋局の右京大夫と同様、近縁者によって相伝されている可能性が強い。

(2) い (五位)

「内侍所刀自五位」⁽³⁸⁾とあるように、内侍所の刀自を務め、「さい」と同様、後奈良天皇期を通じて見えている。

この「さい」は次の史料⑨に見えるように、高畠与三郎という武士を婿に迎え、「徳夜叉」という孫がいた。

⑨ a 「内侍所五位、五疋保童圓所望之間、七百粒遣了、十疋送之、

孫之用也、高畠与三郎子也」(天文一四・四・二六)

b 「昨日内侍所之五位、和歌三首挑⁽³⁹⁾之、高畠与三郎用敷、題野

遊、逢後増戀、名所瀧、称名院に令談合遣⁽⁴⁰⁾之／梓弓春日

おほえす野を遠み／さそはれ出る袖の色々／…」(天文一五・

二・二四)

c 「内侍所之五位、又和歌二題⁽⁴¹⁾兆候間調遣、澤杜若、庭上愛

竹／あさ澤のあさくやはみむゆかりある／色にへたてぬかき

つはた哉／…」(天文一五・三・一二)

d 「自内侍所之五位方、両種〔ひしこ、串柿〕・鈴物〔二〕

送之、高畠与三郎子徳夜叉与予之由伝⁽⁴²⁾之、五位孫也」(天

文一七・一・一四)

e 「次内侍所へ罷向、茶器返了、油物〔十五〕、五位孫徳夜叉

〔高畠与三郎子〕に遣了」(天文一七・三・一〇)

f 「内侍所五位申源氏外題紙〔五十七枚〕、行事官に兆⁽⁴³⁾、

之、今日出来持来、則持遣了」(天文一七・五・一八)

g 「内侍所へ罷向、五位孫来〔高畠徳夜叉〕、栗〔いか三〕取寄遣⁽⁴⁴⁾之」(天文一八・九・二〇)

h 「五辻被⁽⁴⁵⁾来、高畠徳夜叉勸進とて短冊持来、々五日彼父百ヶ日敷」(天文一八・一〇・二二)

興味深いのは、⑨b・cに見えるように「さい」は、言継に和歌を三首作ってくれるように依頼してきたので、言継は「称名院」、つまり三条西実隆の子公条と相談しそれに応えたのだが、それらは彼女の婿の高畠与三郎のためのものであったらしい。

高畠与三郎は、天文一四年三月三日に内裏で行われた闘鶏を見物に来た細川晴元(右京大夫)の「伴衆」の一人として、薬師寺与一や一族と思われる高畠神九郎らとともに参内している⁽⁴⁶⁾。与三郎の父かもしくは叔父あたりかと思われる高畠与十郎も言継の日記に天文年間初頭から見えており、『経厚法印日記』天文元・一一・一一に所載されている文書の発給者として長信という名であったことが知られ、今谷明氏の研究⁽⁴⁷⁾によると、享禄五(一五三二)年、晴元政權下で山城郡代を命ぜられ、在地支配を担った人物らしい。高畠氏の系譜などは今のところ管見に入らないが、『仁和寺心蓮院文書』所収の永正一三年八月二五日付の幕府奉行人奉書に「知行分城州鳥羽高畠庄西東内地下人高畠与三郎・同神六事」と見えているので、洛

南鳥羽の辺り、恐らく現在京都市南区上鳥羽高島町・西九条高島町として名前が残っている辺りを本貫とする国人クラスの武士ではないかと考えられ、細川晴元の被官としてこの時期成長してきた者であろう。

ここでは、内侍所の刀自が、当時の有力武士の子弟を婿にしていた事実を重視したい。平安時代以来の貴族(公家)たちの日記を読み進めると、または律令体制段階の後宮制度や平安中期の宮廷女房の世界から見ると、このクラスの女性の名前もほとんど記されることがない人々であるが、この一六世紀になると、場合によっては堂上の公家衆よりも経済力や政治力を持ちかねない場合があったように感じられる。

次の史料⑩に見えるように、彼らは和歌だけではなく、室町文化の一つ、能・狂言にも深く通じている人々であった。

⑩ 「今日内々申沙汰也、已初刻参内、…午刻御能初候、大夫細川右京兆内高島神九郎子〔兄十才、弟八才〕沙汰候、座衆各馬まはり衆也、近比あいらしき事也、右近・八島・胡蝶・たちほ・大曾・七騎落・紅葉狩・樓大鼓・二人静・岩船等也、此後座之衆計被_レ歌、暫也、夜五過時分迄祇候、右京兆見物、黒戸跡にて一盞被_レ下候、大夫に御扇被_レ下云々、鬼間辺長橋にて御うたいの時、各召出一盞被_レ下候了、…」(天文一四・三・二一)

この日、内裏で能の会が催され、堂上公家や尼門跡らとともに参会した言継は、細川晴元被官高島神九郎の子息の幼い兄弟が演じる愛らしい姿に目を魅かれている。彼らは、天文一五年の内裏の闘鶏にも、見物に参内した細川晴元らの前で「音曲」を演じており、当時の公武の社交界で人気者であったのであろう。

高島与三郎は、残念ながら天文一八年に亡くなってしまったらしいが(⑨h)、与三郎亡き後、「五位」が言継に求めてきた「西行読之御裳濯川・宮川等之歌合一冊」⁽⁴⁵⁾や「竹内殿御手本」⁽⁴⁶⁾などは、みな残された徳夜叉の教育のためと考えてかまわないであろう。彼も当該期の室町文化を支える一人として育っていったに違いない。

(3) 女孺

言継の日記に限らず、ほとんど名前ではばれることがなく、確認できたのは、「女孺あ、子」と『時慶記』に見える「女孺鶴」⁽⁴⁷⁾くらいである。定員は不明であるが、『看聞日記』に「女孺(孺)二人参」という記事が見えるので、室町期には二人いたことがわかるが、以後もそうであったかは不明である。

他の下級女房よりも身分が下であったことは、次の史料⑪から知られる。

⑪ 「今日、新菅宰相益長卿・〔綾小路中将〕有俊朝臣等召_二女孺_一欲_レ令_二撤_二公卿膳_一之間、予教訓曰、面々祇候之所へハ女孺ハ不可_レ

参候、女官ヲ召テ可_レ被_レ仕候、仍彼令_レ退_ニ女孺_一了、如_レ此事、禁中之作法面々更_レ不_レ弁_ニ先規_一也、彈正尹・中御門大納言已_レ下雖祇候、無_ニ才学_一勿論、禁中細_ニ内々之儀_一ハ、非_ニ近習之輩_一ハ更_レ不_レ知事也、凡女孺ハ常御所ノ御縁ヲハ不_レ通也、今程ハ女中物クサクナリテ、ソコ通テ何事セヨナト仰敷、不_レ可_レ然事也、女房下臈〔蔵人事也〕モ常御所ノ庇ヘハ不_レ参也、台所別当〔命婦〕ハ庇マてハ参スルナリ、近比ハ庇ニ又物ヲ作ツカレタリシ所マてハ、御下参_レテ酒ナト飲タリ、女官ナと常御所ノ御通ナトヘ被_レ召ル、事、更無_レ之、但主上密々御湯殿ノ上マて渡御アリテ、隔ノ遣戸アケさせられて、女官ともニ酒ノマセテ叡覧ノ事ハ、乗_レ興臨時之處分、後小松院御宇拝見了、あことて老若ノアリシ〔中御門大納言父中御門中納言入道宗宣卿〔初ハ宗量事也〕妾也〕物ウタわせテ酒ノマセラレシ、ソレモ至極ノ御酒宴ノ後ノ事ナリ〕〔建内記〕文安四・一・二三

内裏で公卿たちが食事をした際、東坊城益長・綾小路有俊らがその膳を女孺に命じて片付けさせようとしたので、記主の万里小路時房（当時前内大臣）は公卿が祇候している場に女孺を参らせてはならず、こういう場合には女官を呼んで片付けさせるのだと注意したというのである。このことに関連して、女孺は「御縁」を通らせることはないはずであるが、最近では女房たちが「物クサク」なって、

ついついそこを通ってこうせよ、とか命じるものだから、そういうしきたりを守らなくなっているのは問題である。以前は、女官などですら「常御所ノ御通」にまで呼ばれることはなかったはずで、興に乗られた天皇がこっそりと御湯殿の上までお出ましになられて「隔ノ遣戸」を開けさせ、女官たちが酒を飲むのをご覧になられたり、「あこ」という老女に唄わせたりされていたのを、後小松院の頃に見たことがあるくらいである、と。

この女孺の出自が知られるのは、すでに奥野氏も触れられている次の史料^⑫である。

⑫ a 「女孺姉、前之女孺昨日遠行云々、清水寺目代〔圓陽院宗澄〕

女也、不便々々」(天文一五・二・二一)

b 「内裏御神楽」〔戊刻〕五時分参内、各雖_ニ参集_一、以外風雨之間、夜半以後出御也、女孺姉去月廿日死、然者輕服暇之旨也、仍如_レ此也、神慮難_レ計事也」(天文一五・三・四)

天文五年の二月二〇日に、現任の女孺の姉で元女孺だった女性が亡くなり、彼女たちは清水寺の坊官で目代を務める圓陽院宗澄の娘であったという。言継は、やはり名前を記さないが「不便々々」と結構悲しんでいるところを見ると、この前女孺とは親しい関係にあったことが推測される。女孺の職が姉妹で相伝されていることを考慮すると、言継の実母とも近い間柄であった可能性がある。

この圓陽院については、言継は、天文三年に前述の治部又四郎(大蔵丞となる前の名)らと共に内裏の堀のくいに必要な木材を提供するように命令に行っており、以前から面識があったようである。別に言継が鞍馬寺に参詣に行った際にも、真勝坊という坊で「元之女婦」という女性と対面し「筆一对」を贈っているが、京都周辺の寺院の坊官の家がこのクラスの女性たちの供給源となっていることが知られるのである。

第三章 台所

「台所衆」⁽⁵³⁾とか「末衆五人・同非司」⁽⁵⁴⁾などと呼ばれている女性たちであり、表1のように阿茶・阿かゝ・かゝ・むめ・たとの五人がこの時期のメンバーとして安定して現れている。この中で出自や配偶などの史料が比較的多く残されている「阿茶」と「かゝ」に焦点を当ててみよう。

(1) 阿茶

この女性は、『言継卿記』に最初に現れる享禄五(一五三二)年の記事からすでに「薄妻〔末之阿茶〕」⁽⁵⁵⁾と見え、下級公家の薄以緒の妻であったことが知られる。「薄室〔大所之阿茶也〕」⁽⁵⁶⁾などの表現や、言継が薄家を訪ねた際も以緒と一緒にもてなすことが多いことから、妾ではなく正式な妻であったと考えられる。また、前述し

たようにこの「阿茶」の姉は言継の外祖母の姉妹に当たるとしく、言継にとって遠縁にあたるがそれだけではなく、薄以緒とも「阿茶」との結婚以前より親しい関係にあったようである。

以緒は天文二四(一五五五)年五月二八日に六二歳で亡くなっているのので、「阿茶」との関係が最初に確認される享禄五年には三九歳になっており、彼女もそれより年下と考えられるが、はつきりとはわからない。「阿茶」は天正四(一五七六)年まで台所の女官としての活動が知られ、その頃が七〇歳くらいとすれば、享禄五年には二〇代半ばくらいで、以緒とは一〇歳余りの年の差ということになるうか。

前稿でも触れたように、天文二(一五三三)年一月、以緒の女が高倉永家の猶子として内侍となり、新内侍(名字量子)と名乗った。天文五年二月にはその妹も五条(菅原)為学の猶子として内侍として出仕し、やがて新内侍(名字好子)と呼ばれたため、姉の方は藤内侍と称され、翌一二年二月には勾当内侍に任じた。彼女たちは、その「外祖母」が天文二〇年に亡くなり、⁽⁵⁸⁾そのために一時的に内裏から退出しているが、その記事では阿茶のことに触れられることがなく、阿茶が薄以緒の妻として確認される享禄五年の翌年には姉の方が内侍として出仕し、その三年後には妹もまだ幼いながらも出仕しているところからすると、二人とも阿茶の実子ではない可能

性が強い。

後奈良天皇の皇女を生み、その勾当内侍を務めた姉の方は、弘治三（一五五七）年九月の天皇崩御の直後にその職を辞し、先例通り典侍に昇進し、以後、新典侍として活動が見られる。言継の日記では、娘である後奈良天皇皇女が入室した安禪寺殿に常に侍していることがうかがえる。

その跡を継いで正親町天皇期の勾当内侍を務めたのは、確実な史料では確認していないが、彼女の妹の内侍（菅原好子）ではないかと考えられる。永禄元（一五五八）年三月三日条に「自薄所」、長橋之妹茶々〔八幡田中室〕煩之間」とあり、長橋局の妹で石清水八幡の祀官田中家に嫁いでいた茶々という女性が薄以継のところで病に臥せていることが知られるが、三月八日には亡くなってしまふ。その日の条に「故薄女茶々〔八幡田中室〕以外曉被煩之由候間、早旦罷向見舞、脉取之、痰氣事外也、薄所茶々戌下刻死去、言語道断之儀也、卅三才云々、俄仰天馳走也」とあるように、三三歳で亡くなったこの茶々は薄以緒の娘とあるから、必然的にその姉の長橋局は以緒の娘で内侍となった姉妹のうち妹の方ということになるのである。この茶々も阿茶の実子ではなく、内侍姉妹と同じく以緒の前妻の娘の可能性が強い。

それでは、阿茶には実子がいなかったのであろうか。実は長橋局

には、「いま」という妹がもう一人おり、永禄六年以降、姉の局で生活していることが確認されるが、それ以前には見えないので、阿茶が以緒の妻となった享禄五年以降の出生ではないだろうか。ただ現存の『言継卿記』では阿茶の出産記事は確認されないようなので、この女性も前妻との間の子という可能性も残されている。

（2）か、

当該期の「末之衆」の一人であるこの「か、」には娘がおり、天文二三（一五五四）年に八歳であったその子が風邪を引いたというので言継に薬を求めている記事から、天文一七年に出産したことがわかるが、その頃に言継に診察や薬を求める記事は確認されず、安産でこの辺の情報には詳しい言継の耳にも入らなかった模様である。この記事には、「同乳人手の疵うつく之由申候間」ともあるので、娘に乳母を雇って養育させていたことがわかる。内裏で下級の女房として働き、上級の女房たちと異なり「局」を持たないのだろうか、彼女たちは、乳母に子の養育を任せることが多かったのであろう。「か、」の同僚の「たと」という女性には、「律僧新發」の息子がおり、時折、台所などで番衆として宿直している堂上公家らを招いて開かれる「振舞」に公家の子女らと共に同席したりしていたようである。別な箇所では「小僧」と表現されるこの子のように、寺院に預けられる場合も多かったのであろう。

永禄八(一五六五)年の記事に「広橋垂相之妾之女(一之采女、高畠大和守女)、鬢のそき事に申之間、未刻罷向調⁽⁷⁷⁾之」とあり、後述するように「広橋垂相之妾」とは「かゝ」のことであるから、その娘(この時一九歳)が言繼に髪削をしてくれるように依頼していることがわかる。この記事から、彼女の父親は、内侍所の「ごい」の項でその娘婿として登場する高畠与三郎の一族と思われる高畠大和守という武士だったことが知られるのである。

この「かゝ」の娘の名は今のところ管見に入らないが、成長して内侍所に出仕するようになり、「一采女」の地位を得たようである。後奈良天皇期の一采女は「あこ(阿五・阿子)」という女性であり、後柏原天皇期に入っても永禄三年くらいまではその地位にあったようであるが、次の史料⁽⁷⁸⁾⑬に見えるように、永禄七年には、「前之一采女」「前采女あこ」となっていることから、この年をいくらかさかのぼったところに一采女の地位を去り、「かゝ」の娘と交替したようである。

⑬ a 「暁天発足南都へ下向、春日祭参行、…又賀茂之中室前之一采女に同貝言伝遣⁽⁷⁹⁾之」(永禄七・三・六)

b 「城州賀茂之中室前采女あこ文到、當歸一連〔数十〕送⁽⁸⁰⁾之、祝着了」(永禄七・一一・一)

また、退職後は、春日御師の中氏の「室」となっていることが知

られ、史料⑬ a で言繼が春日祭のために南都に下った際に「あこ」と音信を通じていることからわかるように、当時は南都の方で暮らしていることが知られる。

さて、言繼とこの「かゝ」との付き合いは、後奈良天皇期は、「四分より女官共張行にて一盞有之、広橋・四辻・庭田等也、あかゝ・たとゝかゝなど暁天迄及大飲候⁽⁸¹⁾」とか「又御寝以後、於大所酒有之、かゝ振舞了」など、時折台所で「振舞」われる程度で、他は菓を贈ったり、診察や菓の処方を頼まれる程度で他の女房とそれ程変わるものではなく、前項の「阿茶」のように家族ぐるみの親しい間柄でなかつたようである。しかし、次の代、永禄期に入ると少し事情が変わるようである。

⑭ 「広橋垂相之次男三才、今日色直食初云々、母末之かゝ、柳二荷両種被⁽⁸²⁾送⁽⁸³⁾之、去々年十一月十四日於愚亭誕生也」(永禄六・一・四)

史料⑭に見えるように、永禄六(一五六三)年、「かゝ」と「広橋垂相」つまり堂上の広橋国光との間に生まれた三才の次男の「色直」と「食初」を行ったという記事があり、この子は一昨年の一二月一四日に言繼亭で生まれたという。「色直」も「食初」もともに生後一〇〇日ほどして行う出産儀礼であるが、言繼亭での誕生とい、いろいろな事情があつてこの時になつたらしい。ただ、これ以後、

「かゝ」は「広橋亜相妾」として表現され、「武者小路」や「河端」⁽⁷⁴⁾「河之端」と表記される場所にあったこの「かゝ」の家に言継はしばしば訪れ、お茶を飲んだり雑談したりしているようである。

永禄一一年には、「かゝ」に孫が生まれたらしいが、一采女となつてゐる娘の子なのか、それとも他にも子があつたのかはよくわからない。

(3) むめ(梅)

他の台所のメンバーのうち、「あかゝ」「たと」については、前述のように後者に律僧の子息がいたことがわかるくらいで、言継の日記に比較的よく現れるものの、出自や配偶者・子女のことなどについての情報はほとんど記されていない。

もう一人の「むめ」については、正親町天皇時代の永禄七(一五六四)年の記事に「女官梅〔滋野井妻〕」⁽⁷⁵⁾と見え、滋野井公古(前権中納言、四五歳)⁽⁷⁶⁾の妻であることがわかる。この「むめ」は、元亀元(一五七〇)年の記事に「又女官梅御暇申、明日尾州へ下向云々、仍香篝散・愛洲葉等一包宛遣し之」とあり、台所を辞して尾張国に下つてしまったようである。『公卿補任』によると、夫の滋野井公古は、永禄八年に「酒損」で薨じているので、このことがきっかけであつたのかもしれない。

興味深いのは、天文二二(一五五三)年、「前臺所之むめ」が言

継に「古今集上下」の書写を依頼しており、さらにこの女性が、弘治二(一五五六)年に言継が当時今川義元の許にあつた養母を見舞うために駿河国に下向した際には、近江国観音寺城にいて言継が「牛黄圓一貝」を贈っていることであろう⁽⁸¹⁾。どうも尾張ではなく、近江の六角義賢の家中に再就職しているようで、清水克行氏が明らかにされた、内裏の「女官」であつたが言継との間に娘阿茶を儲け、後に越前朝倉氏のもとで「左衛門督」という名で仕えた女性と同様の経歴をたどつたように推測される。清水氏が「禁裏に「女官」「女嬬」として奉公し、公家と性愛関係をもち、その子女を出産した女性は、公家の妻妾に迎えられることはなくとも、地方社会に活動の場は開かれており、地方武士や戦国大名の妻妾や侍女として厚遇をうけていた」と指摘されている点は、この観音寺城の「むめ」の場合にも適用することが可能であろう。彼女たちのような、下級の女房であっても禁裏で長年勤め、かつ堂上公家の生活にも通じているベテランの女房は地方の新興の大名たちにとって、必要な人材であつたことは確かであろう。「むめ」が尾張国に下つたというのも当初向こうでの再就職が目的であつたのかもしれない。

もう一点、台所にはどうも代々「むめ」の名で仕える女性がいたらしいことを指摘しておこう。後奈良王正親町天皇期に勤めていた「むめ」が辞して尾張国に下向した後の天正四(一五七六)年にも、「末

表3 『言継卿記』に見える下級女房たちの文学活動

	年・月・日	事項	場所
1	天文13,8,18	「自讃歌・百人一首小双紙」を末の「かゝ」のために書写する。	台所
2	天文14,4,12	内侍所の「五位」に「題ある歌双紙」を貸してくれと依頼され、「御室五十首」を貸す。	内侍所
3	天文19,閏5,20	言継、台所で「鳴不動絵」を借用、老母以下に見せる。	台所
4	天文22,6,24	前台所の「むめ」に「古今集上下」の書写を依頼される。	台所
5	天文23,1,26	「台所之衆四人」に「双紙一冊」を読み聞かせる。	台所
6	天文23,2,18~5,26	内侍所の女性たちに平家物語全十二巻を読み聞かせる。	内侍所
7	天文23,4,23	台所の「かゝ」に「精進魚類物語双紙一冊」の書写を依頼される。	台所

ノ衆」アチャ・アカ、・ムメ」と見えるように台所未衆に「ムメ」がおり、当然別人と考えられよう。台所の女房として固定化された名前となっていたのかもしれない。これは他の女房にも確認することができると思われる。⁽⁸³⁾

おわりに

細々とした事実を積み重ねて中世末期の禁裏の下級女房たちの軌跡を追ってみたが、これまでの後宮女房の研究から外れ、また当時の政治的な事件などとも無関係な彼女たちに関心を持ったのは、『言継卿記』において彼女たちが文学に対して積極的な姿勢を持っていることに気づいたことからである。

表3に簡単に整理してみたが、これらの中には、3の「鳴不動絵」や7の「精進魚類物語双紙一冊」のようにこ

の時代に発展・流行した室町時代物語も含まれ、彼女たちがその享受者たちであることがわかり興味深い。さらに最近、日本文学や中世美術の研究者たちとともに室町物語絵巻の一つ『新蔵人』絵巻の研究に参加させてもらったことがその関心をますます高じさせることになった。大臣やお姫様でもない、また鼠や狸などの異類でもない、内裏の内侍と六位の蔵人という、ある意味地味な役柄の人々を主人公とするこの絵巻については、その制作者に恐らく内裏の女房、特に内侍以下の下級の女房たちが深く関わっていると考えられ、平安時代以来の女房文学の伝統が南北朝期以降衰えていくという問題への理解の鍵もこの辺りに隠されていると思われるが、その点についてはまた別稿を予定しているので、そちらに譲ることにし、彼女たちの実像をもう少し史料的に丁寧に追ってみたいと考えてきたのが本稿である。

女孀を母に持つ山科言継に限らず、堂上公家たちと彼女たちとの関係はさまざまな意味で親密であり、さらに幕府関係者や近在の国人などの武家、それに京内外の寺社のメンバーたちとも盛んに交流し、その活動はさらに遠くの国々に及んでいる。都を飛び出していく彼女たちは、宮廷で身に付けた実力で地方に新しい居場所を見つけていくのであり、堂上公家たちが所領からの収入を失い、経済的に行き詰まって地方の権力者を頼って下向していくのとは異なり、

パワフルかつしたたかさを感じる。王朝文化の伝統と新興の庶民的な文化がぶつかり合う、この時期の澁刺とした文芸の世界はこうした女性たちが支えていたと実感するのである。

【注】

- (1) 拙稿「戦国時代禁裏女房の基礎的研究―後土御門・後奈良天皇期の内裏女房一覽―」（『愛知学院大学文学部紀要』四四、二〇一五）。以下、前稿という場合はこの論考を指す。
- (2) 角田文衛『日本の後宮』（學燈社、一九七三）など。
- (3) 中原俊章「中世の女官」（『日本歴史』六四三、二〇〇一）。
- (4) 奥野高広「官女」（『皇室御經濟史の研究』畝傍書房、一九四二）所収。以下奥野氏の研究はこれによる。
- (5) 清水克行「山科言繼をめぐる三人の女性―実母・愛人・長女―」（『史観』一五・四、二〇〇六）。以下、清水氏の説の引用はこの論文による。
- (6) 『左経記』長元九・五・一七（九年五月一七日条をこのように略記する。以下同じ）、『三長記』建久九・一・一一、『後深草天皇日記』正応一・三・一五など。
- (7) 『行親記』長暦一・一〇・二七など。
- (8) 拙稿「中世女房の基礎的研究―内侍を中心に―」（『愛知学院大学文学部紀要』三四、二〇〇五）。
- (9) 拙稿「中世後期の日記の特色についての覚書」（『日本研究』第四四集、二〇一一）。
- (10) 拙稿「室町時代の女房について―伏見宮家を中心に―」（『愛知学院大学人間文化研究所紀要・人間文化』二八、二〇一三）。

(11) 消極的な意味では、朝廷の公事の退転などにより本来日記に書くべき儀式が行われなくなり、書くことがなくなってしまうから、ということもできる。しかし、中世後期には前代に日記を記していた具注暦は用いられなくなり、各自、反古などを利用して日記帳を作成して書くようになっており、毎日の暦面を無理に埋める必要はないわけであるから、それでも書くのは、やはり書くべきことという認識があったとみておきたい。

(12) 今谷明『言繼卿記―公家社会と町衆文化の接点―』（そしえて社、一九八〇）、拙稿「応仁・文明の乱と山科家―その家記の保管を中心に―」（大隅和雄編『文化史の構想』吉川弘文館、二〇〇三）など参照。

(13) 『言国卿記』明応三・七・二八、八・三〇。

(14) 『尊卑分脈』山科言繼の傍注。永祿元年五月一九日に亡くなったという（永祿八・七・四）言繼の実母については、清水克行氏によって、その出自が北尾氏であることが明らかにされている。

(15) 天文二三・五・一五。以下、史料名を明記しない場合はすべて『言繼卿記』からの引用である。

(16) 天文一八・一一・一四、一一・一五、一一・二〇。

(17) 次の正親町天皇の時代に入ると、永祿一〇・六・七に「香需散禁中衆に賦之、御伊茶局（一両半）・若宮・姫宮等御乳人、女官阿茶・あか・梅・たと・女しゆ、大典侍殿之あこ・あか・あちやち、新大典侍殿之あこ、長橋之あちや・五ぬ、伊与殿之阿五、若宮御方御末あか、万里小路内大藤左衛門尉等一包（二両）宛遣之」とあるように、大典侍のもとに三人、新大典侍のもとに一人、長橋局に二人、伊与局に一人と確認される。言繼の交際範囲の変化の關係であろうか。

- (18) 『時慶記』慶長五・八・一六。『御湯殿上日記』の同日条には「にしのとうみんむすめ、ないしにしん上申さるゝ、いまたおさなくて御いままいり、かみあけはなし、…新大すけ殿御あつかりなり」と見え、新大納言典侍の預かりとなっているが、『時慶記』では新典侍との贈答関係などの記事が多く、新大納言局のことはほとんど見えないので、『御湯殿上日記』の方は書き誤りかと思われる。
- (19) 『時慶記』慶長九・六・三。
- (20) 「鍋」も「辰」もそうであるが、このクラスの女性には同名のものが結構いて紛らわしいので注意する必要がある。
- (21) 『時慶記』慶長七・六・二五など。
- (22) 『時慶記』慶長九・九・二九。
- (23) 後述する「胡蝶」は「下女」と表現されており、もう少し下の身分であろうか。
- (24) 『時慶記』慶長一四・一・八、一・二〇。
- (25) 『時慶記』慶長一四・一・一三。
- (26) 『言国卿記』文亀一・六・一七。
- (27) 『時慶記』慶長一四・七・二四。
- (28) 天文一・二・二〇。
- (29) 永禄一・三・一二など。
- (30) 天文一・六・二八、同二・一・一六など。
- (31) 天文二・二・一八。
- (32) 天文四・一・二一、同三・六・一六など。
- (33) 天文一・三・一二・二。
- (34) 『時慶記』慶長七・六・七〇、六・一〇、六・一四、六・一八、一九、六・二一。
- (35) 天文二・二・六・四。
- (36) 享禄二・二・二三。
- (37) 天文二・九・二七。
- (38) 永禄七・三・二七。
- (39) 天文一・三・一一・一四。
- (40) 天文一四・三・三。
- (41) 天文二・一二・二八、天文三・一・一二など。
- (42) 注(12) 今谷氏著書八七ページ。
- (43) 『経厚法印日記』天文一・八・二八に所載される山村正次から栗田口惣庄に充てて出された文書には「自_レ山村方折昏案、山城国五郡高畠与十郎令_レ存知_レ候、今度本願寺御敵被_レ申付、悉被_レ成_レ御成敗_レ候、然其闕所之事、下五郡者、与十郎方存知候儀候間、自_レ何方_レ申候共、可_レ被_レ成_レ其御心_レ由、此方へ被_レ申付_レ候条、如此二候、萬一自_レ何方_レ申越候共、此方へ可_レ有_レ注進_レ候」とあり、山城国下五郡(紀伊・宇治・久世・綴喜・相楽郡)を管轄するものであったらしい。
- (44) 天文一・五・三・三。
- (45) 天文一・九・二・二。
- (46) 天文二・三・五・二〇。
- (47) 天文一・七・一・二二。
- (48) 『時慶』文禄二・二・一、二・二〇、慶長一四・七・二。
- (49) 『看聞日記』永享六・三・二二。
- (50) この「あこ」という女官が、中御門宗宣卿の妾であったことは、前述の長橋局の官女小督が庭田雅行の、そして女婦であった言継の母も山科言綱の妾であったのと同様であり、他にも広橋兼秀(当時四七歳、権大納言)の「当妾」で、「前女官た」という女性が、兼秀が

大坂へ下向中にお産で亡くなったという記事がある(天文二・三・二二)。このような堂上公家衆と内裏の下級女房との男女関係はそれ程珍しくないものであったようである。

- (51) 天文三・三・一二。
- (52) 弘治二・一・三〇。
- (53) 天文一九・一・一。
- (54) 天文一五・一・七。
- (55) 享禄五・六・一三。
- (56) 天文一三・二・二二。
- (57) 天正四・七・二三。
- (58) 天文二〇・二・一一。
- (59) いっ生んだかははつきりしないが、天文九年頃ではないかと考えられる。『御湯殿上日記』天文九・一二・六に「しんないし殿よりさんけの御とふらいて候とて」に見える「さんけ」は「産下」だろうか。
- (60) 弘治四・二・五に「次薄所へ罷向、前長橋局同見参了」とあり、薄以繼(言繼の子鶴松丸、弘治二年以緒の養子で園基国の子以清が早世したため養子に入った)のもとで対面した「前長橋局」は姉の方の藤原量子であろう。『惟房卿記』永禄一・五・七にも「職事礼之事、以樽代三ヶ可調之由、前長橋被申云々」と見え、すでに前職であったことが知られる。
- (61) 永禄一〇・一二・一〇によれば、この女性には娘があり、長橋の局で、「齒黒付」を行なっている。
- (62) 永禄一二・六・五。永禄六・七・一一などに見える「御今」。
- (63) 天文二三・一二・一三。

- (64) 天文二二・閏一・二四。
- (65) 天文二三・一一・一〇。
- (66) 天文二二・閏一・二五。
- (67) 永禄八・一・二。
- (68) 永禄三・一・一〇に見える「二采女」はこの「あこ」かと思われる。
- (69) 天文一一・三・一六。
- (70) 天文一九・閏五・一五。
- (71) 永禄七・三・一四など。
- (72) 永禄一一・九・一。
- (73) 永禄九・一〇・五、同九・一一・三。
- (74) この河端は現川端通のある鴨川沿いではなく掘川の方の近辺ではないかと考えられる。
- (75) 永禄一一・八・三。
- (76) 永禄七・一・七。
- (77) 『公卿補任』永禄七年の滋野井公古の項。
- (78) 元亀元・七・一八。
- (79) 天文二二・六・二四。
- (80) 中御門宣胤娘。その姉が今川氏親室であった。この旅については、注(12)今谷氏著書二〇九ページ以下を参照のこと。
- (81) 弘治二・九・一二。
- (82) 『言経卿記』天正四・二・一九。『言経卿記』天正四・五・一三にも「次台所へ立寄、阿茶・あか・梅・女婦等ニ香霽散一両宛遣之」というように「むめ(梅)」が確認される。
- (83) 奥野高広氏が引用する『後水尾院御年中行事』に「一ノ采女は内侍所の刀自を兼帯して、近代内侍所にさふらふ、二ノ采女はあちやと

號、：四ノ采女はあかゝと號す」というように、近世にはいると内侍所の采女は「あちや(阿茶)」「あかゝ」などの名で固定化されていたようである。ただし、表1からも明らかのように、戦国時代の内侍所はまだこれらの名前で固定化されていたわけではない。

(84)『新蔵人』絵巻については、阿部泰郎監修・江口啓子・鹿谷祐子・玉田沙織編『室町時代の少女革命 『新蔵人』絵巻の世界』(笠間書院、二〇一四)に原文・現代語訳及び解説・研究成果がまとめられている。松蘭は、江口・鹿谷・玉田の三氏と第三回名古屋中世文芸・歴史研究会(二〇一五年一月一日、中京大学名古屋キャンパス)で、『新蔵人』絵巻をめぐる諸問題」として共同報告を行い(松蘭のテーマは「中世後期における蔵人と禁裏女房について」)、さらに二〇一五年三月二七日、アメリカ・シカゴで行われたAssociation for Asian Studiesの2015 Annual Conference⁹⁾、三氏と共にパネル「Transgressive Tales in Premodern Japan : Gender, Sexuality, and Women's History through "The New Chamberlain"」で報告を行った(松蘭のテーマは「Social Change amid Female Palace Attendants in the Fifteenth Century」)。この報告では司会のMelissa McCormick氏(ハーバード大学)「Discussantを引き受けていただいた阿部泰郎氏(名古屋大学)、それに英訳や英語の発音などで、Gregory Rohrer氏(愛知学院大学)に多大のお世話をいただいた。この場をもって厚くお礼申し上げます。

